

ルソーに於ける従属性について

横 山 ひ ろ み

この小論は、ルソーのいくつかの作品を中心として、特に男女の人間関係における従属性の問題に注目し、その様相、変化を分析することにより、彼の恋愛観、家庭観を明らかにし、また彼の著作と実生活のかかわり方、ひいてはそこに現われる彼の実像を捉えようと試みるものである。

はじめに、彼の作品の中で男女の依存関係がどのように設定されているか検討してみたい。我々はそこに2種類の人間関係、つまり男性の女性への従属関係、および女性の男性への従属関係を認めることができる。そこでまず最初に男性の女性への従属関係を、『新エロイズ』において考察してみたい。

『新エロイズ』は、スイスのジュネーヴ湖畔の小さな町を舞台に、多感な若い娘ジュリを主人公とした書簡体の小説であり、彼女の家庭教師であるサン・プルーとの恋愛をめぐる葛藤が主題となっている。ここで、彼らの関係を分析するにあたり、その期間をジュリの結婚に至るまでの間、つまり2人が真正面から向かい合い、愛の模索の中で生きた時期に設定することにする。まず社会的・身分的な面で、ジュリはサン・プルーに対して優位な立場にあると考えられる。つまり、彼女は貴族のひとり娘であり、サン・プルーは平民の出で、彼女の母に請われた家庭教師にすぎない。また彼らはさまざまな愛の局面を迎えそれを乗り越えてゆくのであるが、我々はその状況を分析する過程において、年齢的にはサン・プルーの方が2歳年上であるにもかかわらず、2人の進むべき方向を決定し、判断・指示を与えるのは常にジュリの方であることに気づくのである。この作品はサン・プルーからの愛の告白の手紙によって始まり、身分違いの到底容認され得ない恋愛が、運命の糸にあやつられながらも

愛の情熱と美德への回帰の間を大きな振幅で揺れ動きながら進行してゆくさまが生き生きとした言葉で語られているのであるが、我々はそこに主導権を委ねられたジュリと、自らの責任と判断を放棄し、彼女に完全に依存したサン・プルー、の2人の力関係をはっきりと見出すのである。まずサン・プルーは初めて彼女に愛を告白した後、自らその告白の責任を取って彼女の家を退く決意の表明さえできず、その判断をジュリに仰いでいる。「私の過ちはあなたに由来しているのですから、私の処罰もやはりあなたに下してほしいのです。……お気に召すように追放してください。あなたのなさることならなんでも我慢できます。けれども、自分から逃れて行くことはできないのです。」⁽¹⁾ 彼はジュリの命令を待ち、それに従うことにより自己の可責から逃がれようとする。「つまりは、あなたが私の運命についてなにかを命じてくださるならば、なにを命令されようとも、せめても私は無謀な希望を抱いたわが身を責めないですむのです。」⁽²⁾ 彼の自己判断の停止、ジュリへの服従の誓いは余りにも饒舌に語られる。「どうか私を放置なさらないでください。せめてわが運命を左右してください。どのような意向をお持ちなのかおっしゃってください。あなたが何を命令されようとも、私は服従を知るのみです。」⁽³⁾ 「いえ、私はなにも期待していません。なにかを期待する権利は私にはないのです。ただひとつ待ち望んでいるあなたの恩恵は、私の処刑をいそいでくださることです。……私を処罰してください。そうなさるべきです。」⁽⁴⁾ それに対してジュリは権威ある命令者として答えている。「そんなお考えでお行きになってはなりません。……でもあなたは……あなたはここにいらしてようございます。」⁽⁵⁾ 自らの名誉を失う危険と恋愛の魅力の間で迷いながらもジュリは、2人の将来についての判断を自分に任せるように迫りさえする。「わたしたち共通の運命に対する配慮はわたしにお任せになることが2人にとってどれほど大切か、あなたがそれを感じとってくださればいいのですが。……愛のやさしい声に素直におなりなさいませ、そしてもう1人の盲いた者に、悲しいことに盲いてはいますがせめては支えを握りしめている者に、あなたの導きをゆだねてごらんなさいませ。」⁽⁶⁾ それに対してサン・プルーは、いとも簡単に一生涯の運命の支配権を彼女に委

ねるのである。「そうです、私たちの運命の梶をとるのはあなたの役目、きっとそうなのです。……いまこの瞬間から、一生涯、私の意志の支配権をあなたにゆだねます。私を、もはや自分自身にとっては何者でもない、全存在があなたにのみかかわっている人間として、あなたの意のままになさってください。……私たち共通の幸福への配慮は、だから残らずあなたにゆだねます。」⁽⁷⁾ここに至り、サン・プルーのジュリへの従属関係は完全に確立されたと考えられる。ではこのような力関係のもとでは、恋愛はどのような判断を得ていかなる結果に向って進められているのであろうか。彼らの心の振幅の過程を追ってみることにする。

サン・プルーからの愛の告白に対して最初は戸惑ったジュリも、自らの恋愛感情を認めざるを得ない。しかし容認されることのない恋愛が2人を破滅させることを恐れ、あくまでも無垢の愛情のみを追求しようとするが、彼女の気まぐれで最初の接吻を許す。「一瞬で、ただ一瞬でわたしの官能は火と燃え、何をもってしても消しえなかったのです。わたしの意志はなおも抵抗しましたが、それ以後、心は腐敗したのです。」⁽⁸⁾ここで彼女の抑制力が働き、彼にしばらく旅に出るように命令するが、その間に父親の恩人である30歳も年上のヴォルマール男爵との結婚が決められることになり、恋愛との二者択一の苦悩の中で錯乱状態に陥り、そのような自己喪失の中で彼女は恋愛感情に心を委ねた結果、純潔を失うことになる。「あたしはすべてを忘れて、ただ愛だけを想うかべた。こうして一瞬の錯乱が永久にあたしを滅ぼしたのです。あたしは娘として取り返しのつかぬ汚辱の淵に落ちました。」⁽⁹⁾その後、後悔の念により密会の約束をあえて中止し、召使いのために骨折ってやるのであるが、こうして一旦は徳性への傾きによって恋愛感情が抑制されたにもかかわらずその情念は再び優位を占め、彼女は恋愛を貫くことになる。そこでイギリス人の友人エドワードによって2人がイギリスで結婚生活を実現することがすすめられるが、またしても娘としての義務と肉親愛に支配され、彼女はその申し出を謝絶する。しかしついに愛の手紙が母親の見つけるところとなり、それが原因で母親は病の床に伏し亡くなってしまう。彼女は自責と後悔の念に駆られ、恋愛を

犠牲にすることを決意しヴォルマールとの結婚を承諾する。「愛の支配は絶望のみにゆだねられた魂のなかで消えました。わたしは母のうちの最良の母の死を悼むことに余生を捧げます。母の命を奪った感情を、母のために犠牲にいたします。」⁽⁴⁰⁾ こうして彼女は自らの罪をつぐなうために徳性への回帰を決意するのであるが、ここに至ってある事件が、突然その崇高なる選択をくつがえすことになる。彼女は重い天然痘にかかって苦しむが、その間にサン・プルーがパリから彼女の許に駆けつけ、しかも彼にできる最大限の献身として、自分に感染することを承知で彼女の手に触れたという事実を知るのである。彼の身を賭してまでの献身に感動した結果、恋愛感情が一度に彼女の心を満たしつくすことになる。「……わたしは、この最後の試練に耐えることができませんでした。……自分はどうかであれ愛さねばならぬと知りました。罪を負わねばならぬと感じました。」⁽⁴¹⁾ 「ああ、あたしをあなたにお返しするこの愛の感激のなかであって、ただひとつ口惜しいのは、こんな貴重な、こんなに正当な感情を向こうにまわしてあたしが戦ったことなの。自然よ、おお、甘美な自然よ、おまえの権利をすべて取り戻すがよい、おまえを無に帰する無情な徳をわたしはきっぱり捨てます。」⁽⁴²⁾ こうして彼女はサン・プルーへの恋愛に心を委ねたままヴォルマールと結婚し、その後も密会を続けることを決心するのである。以上が2人の恋人達の心の軌跡である。

彼らの心情は、自由奔放なる恋愛への欲求と、理性に導かれた美德との間をためらいながら何度も往復しているが、しかし我々はその振幅が恋愛感情に向って特に大きく傾き、最後にはその感情が支配を勝ちとり、徳性を棄てさせる結果になることを見届けた。しかも2人の恋愛に関して専ら苦悩し、完全なる主導権を握り最後に恋愛を選び取ったのは女性であるジュリであることをもう一度確認しておく必要がある。サン・プルーはあらゆる決断においてその責任から逃がれ、自らの情念に対してジュリのような歯止めをかけることもなく彼女に苦しい判断・抑制を任せ、彼女の包容力ある愛情に安易に甘え、依存しているのである。このように『新エロイーズ』のジュリとサン・プルーの関係において我々は、女性に対する男性の完全なる従属関係を見出し、その結果

として恋愛感情が徳性をしのいで優位な位置を獲得し、その恋愛において男性は傍観者の立場で気楽にその感情を享受していることが分るのである。

次に視点を変えて、女性の男性への依存関係に目を移してみることにする。我々は『エミール』においてこの関係をはっきりと見出すことができる。『エミール』は、孤児として設定された幼児に対して、ひとりの家庭教師が独自の教育理念を具体化させつつ真の人間教育を追求しようとしたものである。それは教育論というよりもむしろ、ルソーが心に描いた理想的教育世界を小説という形の上で体現化したものであると言える。序文における彼の言葉がそれを語っている。「人びとは教育論というよりは、教育についての幻想家の夢を読む気がするだろう。だがそれはどうにもならないのだ。私は他人の考えではなく、自分の考えを書いているのである。」⁽⁴³⁾ それだけこの作品は、彼自身の思想が彼自身の言葉によって率直に語られたものであるといえよう。エミールは発達段階に応じて適切な指導を与えられて成長する。特に青年期における道徳教育は人間教育の完成をめざすものとして重要であると思われる。ルソーにおける道徳では、個人と社会との関係が大きな問題となっている。『人間不平等起源論』において、自然状態にあった孤立した未開人が社会状態に移行し多数の人間と共に暮らすようになると、自尊心 (amour-propre) が憐みの情 (pitié) を陵駕し、他人の尺度・判断を基準として生きざるを得なくなる。つまり人間は自己を見失った存在と化すると述べられている。「未開人は自分自身のなかで生きているのに、社会人はつねに自分の外にあり、他人の意見のなかでしか生きることとはできず、自分自身の存在の感情を、他人の判断のみからえてくることになる」⁽⁴⁴⁾ つまりルソーが主張する徳性とは、悪徳に満ちた社会の中でその悪影響や自らの情念の傾きに服従した結果、自分を見失っている現代人への批判となって表わされているのである。「社会状態にあって、自然の感情の優越性をもち続けようとする人は、なにを望んでいいかわからない。いつも自分の好みと義務のあいだを動揺していて、けっして人間にも市民にもなれない。自分にとってもほかの人にとっても役立つ人間になれない。それは現代の人間、フランス人、イギリス人、ブルジョワだ。そんなものはなんにもなれない。」⁽⁴⁵⁾

こうした現代人への批判の裏返しとして、ルソーはエミールをして社会の中に生きる自然人を作ろうとした。それは社会の中にあってもなお自己省察の眼を持ち続け、何よりも情念を理性の力で抑制できる人間を意味するのである。

「自然人をつくりたいといっても、その人間を未開人にして、森の奥ふかいところに追いやろうというのではない。社会の渦の中に巻きこまれていても、情念によっても、人々の意見によっても、ひきずりまわされることがなければそれでいい。自分の目でものを見、自分の心でものを感じればいい。自分の理性の権威のほかには、どんな権威にも支配されなければいいのだ。」⁽⁴⁶⁾ 自らの情念を克服し、理性に従える人間、彼こそが社会的影響を超越して確乎たる自己を確立することができる。この方針を与えられたエミールはまさに自己内存在を体現化した真の意味での自由人といえよう。

こうして成人したエミールの教育を完成するためには、その人生を共にする伴侶が必要となる。そこでルソーは、完全なる人間エミールにふさわしいソフィという理想的女性像を語っている。それは一言でいえば、男性に完全に従属した女性である。その女性観はソフィに与える女子教育という形で具体的に示されている。「女子教育はすべて、男性に関連したものでなければならない。男性の気に入ること、その役に立つこと、男性から愛され、尊敬されること、男性が幼い時には養育し、大きくなれば世話をやくこと、彼らに助言を与えること、彼らを慰めること、彼らのために、生活を楽しく、快いものにしてやること、こういうことが、あらゆる時代を通じて女性の義務であり、また、女性に小さい時から教えこまねばならないことである。」⁽⁴⁷⁾ そこで、我々は、ソフィのエミールへの従属性を明確にするために、ソフィの教育とその意図をさぐってみたい。彼の女性観の根底には、2種類の自然条件が見出される。⁽⁴⁸⁾ 第1の自然条件は、女性は生来、判断力、考察力を全く持たないという女性の劣等性を示したものであり、その結果として女性は常に男性に対して受動的であり、依存的でなければならないということである。「この相違から、両性の間のいろいろな精神的な関係のなかに、はっきり指定できる最初の違いが生まれてくる。一方は能動的で強く、他方は受動的で弱くなければならない。」⁽⁴⁹⁾ こ

の方針によって、ソフィの教育は創造的な仕事を目的とせず、針仕事や料理などの実用的な家事仕事に向けられ、絵画や音楽という芸術部門についても、実用的価値の範囲内に限られるのである。また男性に従属して生きてゆくためには、女性はまず男性の気に入らなければならない。そのことも教育方針の大きな目的となる。「女性は気に入られるように、また征服されるように生まれついているとするなら、男性を挑発するようなことはしないで、男性に好感を与えるようにしなければならない。女性の威力はその魅力のなかにある。」⁽²⁰⁾ 女性は自らの弱さを補うために男性の助力を必要とし、早い時期から男性の心理についての研究を始め、その心を魅了する技術を得るようにするべきである。その一端として人形遊びが推奨される。人形を飾り立てることによりそこに自らの媚態を注ぎこみ、男性に気に入られる服飾趣味が得られるのである。第2の自然条件は、女性には子供を生むという固有の義務が課せられているという事実である。「『女というものは、必ずしも子供を生むわけではない』とあなた方は言う。そうだ。しかし、女に固有の使命は、子供を生むことだ。」⁽²¹⁾ 女性の存在価値は男性のために出産、育児を行い、生涯その仕事に専念することにあるというのである。こうした出産の使命もまた、女性の人生を男性に従属させることを意味している。まず少女の頃から将来丈夫な子供を生むことを目的として体質作りが考慮される。また出産後長年にわたる育児を完璧に務め上げねばならないという事実により、女性の人生はあらゆる面において束縛されるはずである。育児の義務は瞬時の猶予もなく彼女の生活を根底から支配し、他の個人的興味への移行を許さない。ゆえに女子教育の方針においても常に束縛されることを習慣化することが重要視される。「従属しているということは、女にとって自然な状態なのだから、女の子は自分が服従するように生まれついているのだと感じている。」⁽²²⁾ こうして物心ついた時から、女性は自分の意志やあらゆる自由を奪われ、多様な拘束で縛られ、自己を殺して他人の意志に従わせるよう強制される。このような制約の下で成長した女性にとって、従属は完全に習慣化され、彼女はその生涯を通じて課された義務を何の抵抗もなくただひとすじに遂行し、たとえそれが不正な性格を持つものであったとし

でも自らを支配する男性の意志の下で、完全に温順でいられるのである。「この習慣となった強制から、一生涯女にとって必要な従順さができあがる。というのは、女性はある1人の男性に、あるいは多くの人々の判断に服従せずにはいられないものだし、人々の判断を超越していることもけっして許されないからである。」²³⁾ 以上のように、ルソーが規定する女性の2つの自然条件を検討することによって、理想的な女性の姿がはっきりと現われてくる。それは自己の全存在、身体およびあらゆる精神世界をすべて男性に従属させて生きる女性である。さらにルソーが女性に対して最も重要視している義務として、妻としての貞節・徳性があげられよう。「だから妻は貞節であるというだけでなく、その夫、その近親、すべての人から貞節であると思われることが大切である。……また、自分の良心に対してばかりでなく、他人の目にも自分の美德のしるしを見せることが大切だ。」「ソフィは美德を愛している。その愛は彼女の一番強い情熱となっている。美德より美しいものは何もないからこそ、彼女はそれを愛しているのだ。」²⁴⁾ こうして確乎たる自己を確立した理想的自由人エミールの伴侶として生み出されたソフィは、完全に男性に従属し、自らの貞節を誇りとし、何よりも美德を尊重し、妻として母として家庭人として生きる女性であることが明らかとなった。

我々はまた、女性の男性への依存の同様な姿を『新エロイズ』のジュリとその夫ヴォルマールとの間にも見出すことができる。ヴォルマールは物静かで理性的、経営能力にも優れた手腕を発揮し、クラランの農園の大世帯を完璧なまでの統率力で運営する完成された人物である。既に見てきたように、ジュリは娘時代、サン・プルーとの恋愛を通じて常に彼に指示を与え、導く立場にあった。多くのめまぐるしい心の変遷を経るうちに、彼女は彼の恋人となり、その後残った多少のためらいや、母の死の原因となったことによる後悔の念も、熱病に冒された病の床での恋人の勇気ある献身によって克服して、最終的に恋愛を選び取り、父が決めた相手との結婚後もサン・プルーと愛人同志でい続けることを決心する。つまりサン・プルーが彼女に従属する立場にあった限りにおいて、ジュリは理性の拘束を受けながらもそれを払いのけるだけの力を持っ

た情念の人であったといえよう。ところがいよいよヴォルマールとの結婚式に臨み、彼の影響下に入ろうとしたその瞬間から、彼女の情熱は自分自身でさえ予測し得なかった180度の転換を成し遂げるのである。それは彼女が教会の中で感じた神の崇高さと、夫婦愛の絆の美しさによって鼓舞されたものである。教会の中で彼女はその厳粛な雰囲気^{（54）}に心を打たれ、絶対的な神の存在を感じ、それは彼女の心の中に或る変革を起こす。偉大なる神の目は、結婚式を目前にしてもなおサン・プルーへの愛で一杯になっている彼女の心の中を見透している。神の前で偽りの結婚誓約をすることはできない。神への忠誠をこめて、彼女は心からヴォルマールの妻となることを誓おうとする。しかも偶然、そこに参列している友人、ドルブ夫妻の方を見た時、2人を結び合う穏やかな、そして互いに信頼し合った夫婦愛が彼女を魅了し、それは次の瞬間、彼女自身に夫婦愛を熱望する気持を起こさせる。「愛すべき有徳な夫婦、愛を知ることが少ないからといって、あなた方の結びつきは弱いでしょうか。義務と誠意があなた方を結び合わせています。あなた方はやさしい友だちどうし、忠実な夫と妻、魂を焼きつくす食欲な火に燃えていなくとも、純粹で甘美な感情、魂をやしない、知恵に認められ理性に導かれた感情によって愛し合っているのです。それゆえ、いっそう堅固に幸福なのです。ああ、わたしもそのようなきずなのなかで、それと同じ無垢を回復し、同じ幸福を得たいもの。」^{（55）}夫婦愛の熱望、つまり貞淑な妻へのあこがれ、そして築く善き家庭への憧憬こそ、理性に導かれた感情によって得られるものである。そこでは情熱的な恋愛は否定されているのである。こうして彼女はサン・プルーへの愛を断ち切り、美德のうちに貞淑な妻として生きようとするのである。「甘美な心慰める徳よ、そなたのためにわたしはまた人生を生き始めるのです。そなたこそがわたしに生を大切に思わせてくださるもの、そなたにこそわたしはこの生をささげましょう。そなたを捨てることがどれほどつらいか骨身にしみましたわたしは、二度とそなたを捨てませぬ。」^{（56）}ところで、教会で受けたこれらの啓示により、彼女は自己の変革の証人として常に神を觀ずる方法を探る。というのは、彼女自身もこの突然の心の変革が永続するとは信じ難い、夫を裏切ることがないとは断言できない

からである。過去の心の軌跡を思い起こすだけで、その不安は十分考えられ得る。そこで神をその証人とし、その誓いの実行を見守る監視者とするにより、貞淑な家庭夫人として徹しようとするのである。「この神々しい典型を観照することによって魂は浄化されて上昇し、みずからの低劣な性癖を輕蔑し、卑しい傾向を克服することを学ぶのです。」¹⁰⁷ こうして神を自らの心の矯正者、監視者とすると同時に、彼女自身もサン・プルーの恋人としての立場を脱却し、ヴォルマールの妻になり切ろうと努力するのである。失意のサン・プルーは世界一周の旅に出かけるが、6年後ヴォルマールはすでに2児の母となったジュリのもとへ彼を呼び寄せ、子供の家庭教師として共に暮らすことを依頼する。ある日ヴォルマールが旅に出かけ、2人きりで湖で舟遊びをした際、偶然、サン・プルーがかつてジュリへの恋心を暖めた場所を訪れ、昔の恋の思い出にとらわれて思わず我を忘れるのであるが、彼女は昔の幻想を懸命に払いのけ、きっぱりと彼の情熱を封じる。またその後、彼がなお過去の思い出を引きずりながら、2人の間にはまだ心の通い合う余地があると囁いた時も、彼に今後そのような考えを捨てるようにと釘を刺すのである。「私は声を低くして言いました。『ああ、私にはわかります、私たちの心はけっして理解し合わなくなったのではありません。』『それはそうです』と彼女は変わり果てた声で言いました。『でも、わたしたちの心がこんなふうに話すのはこれが最後にしなくては。』……ジュリさんについて申しますと、私の眼が見て、心が感じたのですが、あの人はあの日およそ人間の魂が耐えうるかぎりの闘いに耐えました。しかも勝ったのです。」¹⁰⁸

このようにヴォルマールとの結婚を境に、ジュリはサン・プルーに対する恋愛の指導者としての立場を捨て、ヴォルマールの妻としての役割に徹し切るのである。ではあの激しかった恋愛感情はどのように変化したのであろうか。我々はその恋愛感情が友情に変質化されるのを見るのである。恋愛感情はただ1人の相手を対象とした利己的で偏った感情であるがゆえに、集団の中で孤立し、人間関係の均衡を崩す恐れがある。クラランの大家族集団には夫妻、サン・プルーの他に、子供達、ジュリの父親、従姉妹、使用人やその家族達などがある。

その集団の結合を維持するためには、たとえ密かな形であるとしても恋愛は到底受け入れられるものではない。まず恋愛感情を否定せねばならない。その上で彼女は感情そのものを友情へと変質化させるのである。「確かに友情は恋愛のような喜びは与えない。しかしながら友情だけが我々に幸福を保証してくれる」⁽⁹⁴⁾ というグルシーの言葉通り、夫を中心とした家庭生活において人々が相互に共有でき、幸福が得られるのは友情であり、それはまさに、結婚式の際にドルブ夫妻を見てジュリが感じた夫婦観・幸福観と一致するものである。こうして彼女はサン・プルーを、恋人から友人へと変えるのである。「あなたは愛情深い恋人をお失いになりましたが、忠実な友を得られました…」⁽⁹⁵⁾ しかも彼女は恋愛感情をただ捨て去ることはしなかった。過去の苦い経験から、恋愛感情を心の中から追い出し、視野の外に見失った場合、その情熱がいつのまにか心に忍びこみ彼女の存在を再び支配する可能性を十分に考えた上でのことである。彼女は恋愛感情を穏やかな友情へと変えたまま心の中に留めて常に墮落への予防剤として利用するのである。「わたしとしましては、あまりにも違った感情を知りましたから、この感情に警戒心をもたないのです。それは性質を変えたのだとわたしは感じておりまして、少なくともその点でわたしの過去の過ちが現在の安心のもとになっているのです。……そうすると以前の低劣さの記憶が再度の転落をふせぐ予防剤になることができます。」⁽⁹⁶⁾ 彼女は友情を持つことにより、クラランの構成員すべてと互いに密接な信頼関係を築き上げることに成功する。サン・プルーはこう述懐する。「すべてが愛情によってなされます。……まるで主人の英知と奥方の感情の一部が召使いのひとりひとりに移っていったかのようです。それほど彼らは分別があり、親切で、誠意があり、彼らの身分を越えているのです。」⁽⁹⁷⁾ 彼女は大家族の長ヴォルマールの妻として誇りを持ってその役割に徹するのである。こうして彼女は自己の意志の強さと、神の力も借りて恋愛感情を抑制し、友情へと変質化させた。それはまさに、自らの力で情念を克服したことを意味する。この点においてジュリは、エミール同様、自己抑制力を持った有徳な人物として描かれ、同時にソフィ同様、夫たる男性に忠実に従属し、貞節を誇りとする理想的女性としての人物像も確

立しているといえよう。

以上によって、『エミール』におけるエミールとその妻ソフィ、『新エロイーズ』におけるジュリとその夫ヴォルマール、これら2組の男女はともに、女性が男性に従属するという人間関係の共通項を有していることが明らかになった。しかも夫としての男性は冷静、沈着で自己抑制のできる有徳な人であり、また一家のあるじとして家庭経営のできる統率力のある人物である。また妻としての女性は、そこに至る過程についてはソフィとジュリに多少の差異があるとしても、ともに夫を信頼し、従順で貞節な妻として、善き母としての役割に徹し切ろうとしている。我々はこの男女関係の中にルソーがその政治論において主張する堅固な家族体系の拠り所を見出すことができる。『政治経済論』において彼は次のように家庭における父権強化を説いている。「事物の本性から引き出されるいくつかの理由によって、父親は家庭において支配権を持つべきである。まず第一に、権威は父と母の間で平等であってはならない。支配は単一でなければならないし、意見が分かれた時には、判断を下す一つの優越した声が存在しなければならない。第二に例えば婦人には活動できない時期がかならずあるというような、婦人に特有の不都合は、いかにささいなことと考えられようとも、婦人をこの優越から除外するのに十分な理由である。……さらに夫は妻の行動を監督しなければならない。……第三に子供たちは、まず最初は必要に迫られて、次には感謝の意味で父親に従わなければならない。」⁽⁹⁾ 強固な父権によって緊密に結ばれた家族という小集団—ルソーはこれを都市国家と区別して第一次集団と呼ぶ—は、まさに『社会契約論』の基盤となる重要な要素であった。「家族はいわば、政治社会の最初のモデルである。」⁽¹⁰⁾ こうして我々は、これらの作品で描かれている、女性が完全に男性に従属している堅固な家族体系において、ルソーの一連の社会思想の基礎をなす理想的人間関係が高揚されていることを認めるのである。

情念を打ち消した理性の人々、堅実な家庭経営に手腕を発揮する夫達、夫のため、子供のため、家庭のためのみに自らを捧げる忠実で貞淑な妻達。家庭という平穏なる一単位に向って自らの全存在を傾ける有徳な人々、確かにそれは

ルソーの理想であろう。しかし私には、彼はその余りにも完璧で美しい理想を貫き通すには、感性の人でありすぎたように思われる。そこで我々は、一旦完成の域に達したかと思われる有徳なるエミールとジュリが、その後にとどった人生の変遷に眼を向ける必要がある。

まずエミールはどのような人生を歩むことになるのか。我々は『エミールとソフィまたは孤独な人々』においてこの理想的な夫婦のその後の姿を見出すことができる。この作品は未完で終わっているが、全篇がエミールを育て上げたかつての教師に宛てた書簡文から成っており、エミール自身の言葉で彼ら夫婦の破滅が切々と語られているのである。エミールとソフィは結婚後一男一女をもうけて幸福な家庭生活を送っていたが、彼らを引き合わせてくれた教師が彼らの許から立ち去った時を境として、2人は不幸に見舞われ始める。わずかな間にソフィの父母、そして最愛の娘を次々に失ってしまうのである。それまで人生の辛酸をなめずに過ごしてきたソフィにとって、その運命の過酷さははかり知れない衝撃となって彼女を打ちのめしてしまう。「ソフィは娘のあとを追おうとまで思いつめました。この最後の試練に、すでにぐらつきはじめていた彼女の堅固な操は完全に彼女を見放してしまったのです。」⁽⁸⁹⁾ そこでエミールはソフィを伴い、悲しい思い出に満ちた地を離れ、パリへと住居を移すのであるが、大都会の悪徳に身を染めることによって、あれほど緊密であった家庭も崩壊の兆しを見せ始める。まず外的環境に惑わされぬ自己を確立していたはずのエミールが自分自身を見失う。「私は一つの快樂から他の快樂へと、落ち着かぬ氣持でさまよっていました。……私は自分のうちに大きな変化が生じたのを感じていながら、それを認めようとはしませんでした。もはやそこに自分を見出さないのを恐れて、自分自身の内面に目をむけるいとまを自分に与えまいとしていました。」⁽⁹⁰⁾ 一方ソフィは都会の女友達との交際の中にのめりこみ、家庭から心が離反する。「ソフィは……もはや家庭生活や、孤立した暮らしにはつきりした好みを持たなくなっていました。」⁽⁹¹⁾ こうして彼ら夫婦は、「もはや一体ではなく別々の人間になっていった」のである。⁽⁹²⁾ 互いを見失い、その絆を無くした夫婦にとって破滅は速やかに訪れることになる。ソフィは友人のたく

らみにより他の男性の子どもを宿してしまうのである。それはすべて彼女の不貞によるものであった。エミールの怒りはとどまるところを知らない。「しかし姦通したソフィは、あらゆる怪物のうちの、もっとも醜悪なるものではないのか。かつての彼女といまの彼女とのあいだの隔たりははかり知れない。いや、彼女の罪に比すべきいかなる墮落も、いかなる罪悪もありえないのだ。」⁽³⁹⁾ 彼は家族への信頼を否応なく断ち切らねばならない。「私の心は家族と一体になっていることに慣れきっていました。それがいまは少なくともその一部を、家族から引き離さなければならなくなりました。そしてそれは、すっかり全部引き離してしまうよりもむしろ大変なことでした。」⁽⁴⁰⁾ こうしてあらゆる面から細心の注意を払い、準備され実現された理想的家庭は、いとも簡単に崩壊してしまうのである。この小説は未完成のまま中断されており、最後がどのように終るのか諸説があり定かではない。例えばこの小説が完成されたものと仮定して、その全貌においてソフィの不貞にはじまる家庭崩壊が単なるひとつの試練に過ぎない可能性もあるであろう。しかしそのような仮定が成り立つとしても、家長を中心として体系立った堅固な家庭組織は余りにも観念的な理想でありすぎて、ルソーによって1度は破壊されるべき運命にあったように私には思えるのである。

同様にジュリの人生に眼を転じてみよう。彼女もまた最後には家族体系を否定するに至るのである。彼女は波乱に富んだ恋愛を、徳性を尊重する自らの努力で克服し、ヴォルマールの貞淑な妻としての役割に徹したかにみえたが、彼女にとっても自らが組み込まれた、合理的で平穏な家庭はある意味で息づまりを感じるものであった。「こんなことが、結婚して以来、またあなたがお帰りになって以来、わたしが部分的に感じてきたことでございます。どこを見ても満足すべきことばかり、それなのにわたしは満足しておりません。ひそかなもの憂さが心の奥に忍びこんでいます。……わたしにとって大事な人たちへの愛情も心をみたすには足りない。……あなた、わたしは幸福すぎるの。幸福がわたしを退屈させるのです。」⁽⁴¹⁾ そして彼女の真意が告白されるのは、臨終の場面においてである。彼女は或る日、湖に落ちた子供を救おうとして水に飛び込

み、重態に陥る。しかし死の間際になって、彼女は過去のサン・プルーへの恋愛感情は決して消滅していない、家庭夫人となり切るために、自己抑制により情念を消し去る努力をし、完全に成功したと思い込んでいたにもかかわらず、その感情は以前にも増して大きな力を保ち続け、自らの心を再び奪い返そうとしていることを認めざるを得ないのである。「わたしは長いあいだ錯覚しておりました。この錯覚はわたしに役立ってくれましたが、もうその必要がなくなった瞬間にくずれました。あなたはわたしが恋の病から治ったと思ってらしたし、わたしもそう思っていました。……そうです、わたしを生かしたあの最初の感情は、わたしがどれほど押し殺そうとしても空しく、心のなかに凝集したのです。それはもう恐れなくともよくなったとき、心中に目覚めました。……あなた、わたしは恥かしい思いをせずこの告白をしております。心ならずも残りましたこの感情は意志を越えたものでした。なんらわたしの純潔を傷つけるものではありませんでした。」⁽⁴²⁾ 現実の家庭生活の中で恋愛感情を押し殺さざるを得なかったことを悔やみながら、彼女は死後の世界でこそ何の束縛も受けずに恋愛感情に身を任かすことを喜ぶのである。それはまさに恋愛讃歌であろう。「しかしあたしの魂はあなたなしに存在しましょうか？あなたなしにあたしがどんな幸福を味わいましょうか？そうです。あたしはあなたと別れるのではありません、あなたを待つのです。徳は地上ではあたしたちを隔てましたが、永遠の住みかではあたしたちを結びつけてくれましょう。あたしはこの甘美な期待を抱いて死ぬのです。あたしの命と引きかえに、罪にならずにいつまでもあなたを愛する権利を、またもう一度あなたを愛しますと言う権利を手にするよろこびに心みちて。」⁽⁴³⁾

以上のように、女性が男性に完全に従属する人間関係の中で、男性が夫として家庭を統轄し、運営する家父長的家族体系は、ルソーの政治思想の根幹を成すものであるにもかかわらず、まさにその男女関係を模範的に体現したエミールとソフィ、ジュリとヴォルマールには、ともに合理的な夫婦関係の否定、組織立った家庭生活の破綻が非情なまでに用意されているのである。しかもさらに注目すべきことは、既に見てきたように彼らが自らの情念の炎を制御するす

べを知った有徳な人々であるという事実である。つまり、完全な自己抑制力を持ち、自らの判断で徳性への道を選ぶ能力を有した彼らでさえ、自己を見失ったうえに、不貞な妻を見捨てねばならず、また家庭の幸福に倦怠を感じ、死の間際にその本音として、昔の恋人への恋愛感情が意志に反して抑え難く、すべての徳性を超越して心を奪おうとしていることを告白せざるを得ないのである。ルソーは、政治思想的には堅固な家父長的家族制度を主張しながらも同時に、ロマンの世界においては最後に、余りにも完璧で合理的な家庭組織や、美德を信奉して生きる人々を否定してみせるのである。私はそこに、ルソー自身の女性の男性への依存関係、ひいては平穏な家庭生活に対する拒絶意識が作用しているように思えるのである。

そこでルソーの作品における男女の従属関係の考察から一旦離れ、彼自身の実生活における関係に眼を向けてみたい。まず男性の女性への依存に関して問題となるのは、ヴァランス夫人との関係であろう。母の死と引きかえにこの世に生を受けたルソーは、10歳まで父親と暮らした後は、親戚の間で育てられ、13歳の時彫金工の許へ徒弟奉公に出される。しかし16歳の時、ジュネーヴ市の門の閉鎖に遅れたためそのまま出奔し、アヌシーでヴァランス夫人を紹介されるのである。当時、無一文に近い少年を、12歳年上の夫人は自宅に暖かく迎え世話をしやり、その後多少の中断を含むが約15年間、彼の保護者となり続けるのである。夫人には既にクロード・アネという愛人が居り、彼が夫人の家政経営を引き受けていた。ルソーは彼らの中に加わるわけであるが、当初は「Maman」「Petit」と呼び合う親子のような関係であったが、後に彼も夫人の愛人となり、三角関係が成立する。しかし注目すべきことは、ルソー自身がこの3人の特異な関係を非常に歓迎しているという事実である。「しかしこの地位をわたしから奪った人間を嫌わないで、わたしが夫人にいただく愛情がじっさいにこの人間の上にまで拡大されていくように感じた。」⁽⁴⁴⁾「わたしたちはみんなが幸福になれば、死のみが破壊できるような結びつきのうちに生活していたのである。」⁽⁴⁵⁾それは何よりもルソーによって、男女の正当な結びつきによる家庭の成立が拒否されているためであると考えられる。家庭の成立と同時に、双

方は互いに家庭内の役割を引き受け、運営に参加せねばならない。しかし彼は家政上のいかなる役割も引き受けたくはなかった。あくまでも愛人としての立場で気楽に恋をしていたかった。その意味で、有能な家政経営者であるアネの存在が必要であったと考えられよう。こうしてクロード・アネを夫人との間に組み込むことにより彼は夫人への完全な従属と甘えの中で、何にも束縛されずに与えられるままに気楽な恋愛を楽しむことができたのである。つまり彼自身の実生活においても、女性に依存する力関係の延長線上に安直な恋愛への志向を見出すことができるのである。しかも彼にとって、やさしい夫人への愛、彼女と過ごした気楽なレ・シャルメットでの日々は生涯最高の幸せとして心に留められているのである。それは次の2例によっても容易に察せられよう。彼は、後にラルナージュ夫人の恋人となった時もこのように告白している。「わたしが真の愛情を感じたのは生涯にただの一度しかなく、その相手はラルナージュ夫人ではなかった。またわたしはヴァランス夫人を昔も今も愛している、そのようにはラルナージュ夫人を愛さなかった。」⁽⁴⁶⁾ また、後年、安定した幸福生活を得たと思った時でさえ、夫人との日々と比較し、当時の幸福への思いを募らせるのである。「つまるところ、もっとも渴望していた幸福のさなかにいながら、少しも純粋な楽しみを味わうことができない。そこで、青春の清澄の日に思いを馳せ、ときには溜息まじりにこう叫んだものだ。『ああ、ここもやっぱりレ・シャルメットではない。』」⁽⁴⁷⁾

次に、男性に対する女性の従属関係に眼を移してみよう。ルソーに従属した女性として、我々はテレーズ・ルヴァスールを挙げることができよう。彼がテレーズと最初に出会ったのは、ヴァランス夫人の許を立ち去ってから3～4年後、33歳の時であった。彼の下宿先の娘であったテレーズは、教育もなく無知であったが、素朴で気だてのよい女性であった。ヴァランス夫人の保護を辞し、希望に満ちて出てきたパリであったが、まだ世に出る以前のルソーにとって当初の野心はともすれば挫折しがちであった。そのような折、後女の存在は、日増に愛着の念を伴って思い出される夫人の代りとして、空虚な彼の心の中で大きな位置を占めるようになるのである。「消え去った野心のかわりに、心をみ

たしてくれる、なにかはげしい感情がわたしには必要だった。つまり、ママンのかわりがほしかったのだ。』⁽⁴⁹⁾ しかしここで我々は、彼と共に暮らしてくれる女性として、テレーズはヴァランス夫人の代りとなっただけはいるが、ルソーをめぐる従属関係は全く逆転していることに注目せねばならない。夫人は彼にとっては保護者であったが、テレーズは経済的にも精神的にもすべて彼に依存していた。つまりテレーズとルソーの間には、エミールとソフィ、ヴォルマールとジュリ同様に男性に対する女性の完全なる従属関係が存在しているのである。彼は結局テレーズを一生の伴侶とするのであるが、しかしながらその足どりをたどってみると、我々はそこに多くの反家庭、反家族主義の要素を見出すのである。まず彼はテレーズとの間にできた5人の子供達を次々と孤児院に送り込んだ。後に『エミール』によってあれほどまでに愛情に満ち、周到に準備された教育的思想を完成させたルソーが、自分の子供が生まれるやいなや、すべての養育、教育の義務を放棄して次々に孤児院の事務所に預けさせたその行為自体、意外であり、また彼の敵対者達の格好の非難材料となったのも当然と思われる。しかし彼自身、その行為が窮余の策であると述べてはいるが、実際には当時の社会的風潮として孤児院に子供を多く送ることが賞賛される傾向にあったため自分もその習慣に従ったのであるとか、自分が育てずに彼らの教育を社会施設に託し、将来ごろつきや山師などよりも、労働者か百姓になるようにしておく方が、市民および父親としてふさわしい行為であるとか、本音としては子供が重荷であるなど、さまざまな自己弁明を行っているのである。「もし子供という重荷を背負っていたら、自分が感じ、信ずることが書けるだろうか。私の子供たちと彼らの母をみじめな貧乏人のろう血によって養わねばならない。……子供たちにとっては、悪党を父にもつより、孤児になる方がずっとよいのである。』⁽⁵⁰⁾ 結局彼は、本来家庭の構成員として重要な要素となるべき子供達をすべて拒絶しているのである。また同時に、妻に対する愛情の欠如も見のがしてはならない。彼はテレーズに対して恋愛感情を持ったことはなかったと告白している。「つまり、わたしは彼女を一目見たときから今日まで、彼女にたいして恋のひらめきを少しも感じたことがない。』⁽⁵¹⁾ 結局彼女は、彼にとっては表

面的な家政婦的な伴侶に過ぎなかったといえよう。さらに彼は、1750年、『学問芸術論』のアカデミー当選によって一躍有名になり、それにともなって知的世界に生きることになるが、そこにおいて彼女の知性の無さが大きな障害となる。「なぜ彼女の才能をみがき、知識をさずけておかなかったかと、いたく悔まれるのである。そうしておけば、この隠れ家でふたりはさらに寄りそうて、差しむかいの長さなどは感じることなく、愉快にふたりの時間をみたすことができたろうに。…ただ結局、ふたりで知識を蓄積するには、あまりに共通の思想が乏しかったのである。」⁶¹ こうしてルソーは、ヴァランス夫人の保護を失った後、従順なテレーズを伴侶とし、自らが保護者の役割を演じて、一旦は心と生活の安定をめざした家庭生活を求めはするのであるが、結局は彼の心の内部の、平穏なる家庭による束縛を拒絶する力が作用して、家庭生活を不満足に感じてしまうのである。「こういった次第で、わたしのえらんだ土地で、わたしの好きな女と、わたし好みの生活をしながら、期待はなにか裏切られ、孤独にちかい心境になった。」⁶² こうした家庭への閉塞感が、その裏返しとして彼に激しい恋愛を渴望させることになる。「こんな燃えやすい感覚をもち、愛のかたまりのような心をもっているわたしが、ただの一度も特定の対象に愛の焰を燃やさなかったとは、何ということであろうか。」⁶³ そしてこの情熱が、彼をして既に夫と愛人のあるドゥドト夫人への燃えるような恋へと駆り立てることになるのである。このように、ルソーが家長を演じ、テレーズを従属させた関係においても、彼自身で男性優位の関係および家庭組織の否定を身をもって示し、さらには恋愛讃美の生き方を貫いているのである。

ここにおいてルソーと彼の作品をめぐる2種類の従属関係のパターンとその相互性が明らかとなった。そこで彼の幸福にとって重要な事柄をまとめてみると、まず他人に依存した状態に身を置き、相手の愛情に包まれ、そのインシアチヴの下で安穏とした生活を楽しむこと、であり、しかも彼が好む依存対象者は女性であること。実際、男性であれば、相手が彼の作によるオペラ『村の占者』の上演を讃美した国王であっても、彼はその拝謁を拒絶しているのである。さらに重要な事として、恋愛感情に大きな優位性を認め、その追求に情熱を傾け

ることである。「わたしの欲求のうち、第一のもの、最大最強のもの、もっとも根づよいもの、それはそっくりわたしの心情のうちにある。つまり、心の底からのあたたかい交際、可能なかぎりあたたかい交際への欲求である。男よりも女、男友達よりも女友達が必要だったのは、とくにそのためであった。……同じ肉体にふたつの魂がやどるとというのが理想で、さもないと、わたしはいつも空虚を感じる。」⁽⁵⁴⁾ これらの事柄は、ルソー自身や、彼の分身であるサン・ブルー⁽⁵⁵⁾ において顕著に認められるのであるが、以上をまとめると、彼における最高の幸福とは、常に恋愛を求め、女性の庇護のもとでその心遣いと厚意に甘えながら、安逸な生活を送ることである。しかし他方で彼が著作において力強く主張している事柄は、およそ彼自身の実像とは正反対の様相を持っているのである。情念や恋愛感情に対する自己抑制への惜しみない讃美、特に妻の、夫への完全なる従属、ストイックなまでの貞節観、そして家庭への全面的な帰属、それによって成立する堅固なる家父長的家族体系の現出、これらを彼は、有徳性という言葉で、ひたむきなまでに情熱をこめて描き出しているのである。

ここに、我々は彼の2つの矛盾した顔を見出すことができるのである。第1は、女性に依存する、恋愛至上主義的なルソー、第2は、自由で徳高い自己革命的ルソーである。前者は彼の生い立ちをめぐる事情によるところが多いと思われる。誕生と同時に母親を亡くし、断えず周囲に母親代りの女性を求め、常に愛を渴望していた彼は、愛に敏感で、人を愛し、愛されることを最も望む気質の持主であった。「生まれつき外にあふれ出る魂をもち、生きるとは愛することと生きてきたわたし……」⁽⁵⁶⁾ こうした家庭環境により、恋愛讃美および女性への依存は当然の帰結として彼の性格の重要な位置を占めたと思われる。後者は、アカデミーの懸賞論文に当選した際に彼が行った自己革命によるものである。彼は当時の放逸なる実生活に、その論文で主張した高邁なる理念を同化させようとしたのである。「翌1750年、もう忘れてしまっていたころ、例の懸賞論文がディジョンで当選したことを耳にした。この知らせをきくと、あの論文の母胎となったすべての思想がわたしのうちに目ざめ、あらたな力を得て活

気づき、幼いころ、父や祖国やプルタルコスなどによって植えつけられた、あのヒロイズムと美德の最初の酵母が、わたしの胸のなかで醗酵してしまった。富や名声を超越し、自由で徳高く、自足すること、これ以上に偉大ですばらしいことはないと思った。……このとき以来、わたしの覚悟はきまったのである。」⁶⁷ この自己革命期を境として、彼は情念的・依存的自己を捨て去ることに努め、自主独立した有徳なる人間へと一挙に変身せんとしたのである。こうした自己革命的ルソーによって、自らの理念を反映して書かれたのが、『エミール』や『新エロイーズ』であるといえよう。その主たるテーマは、どれも人類愛と有徳性に満ち、とりわけ堅実なる人間関係の重要性を描き出したものであった。しかし本来の恋愛への傾きと従属志向から自ら脱却し、有徳なる自己を自他ともに認めさせようとしたこれらの著作ではあったが、既に指摘した通り、『新エロイーズ』においては、過酷なまでの自己抑制により恋愛感情をおさえ、貞淑なる妻へと自らを変身させ、世の人々への美德の模範となったはずのジュリをして、最後にはあえて家庭的拘束への倦怠感を語らせ、また死の間際に恋愛感情の永遠性、優位性を告白させた。また『エミール』においては、周到に計算され尽した人格教育の仕上げとしての家庭生活を、その続篇において、美德を愛し、貞淑の見本のように教育されたその妻ソフィーの不貞によって崩壊させている。また彼の实生活においても、著作活動に専念するためにはいつもそばにいて彼を支えてくれる女性の存在、つまり家庭という基盤の必要を感じ、彼はテレーズを伴侶としたのであるが、しかし彼は家庭という概念から自分に都合のよい部分だけを抜き出したにすぎなかった。つまり彼女は彼にとっては日常生活の世話を一手に引き受け、その煩しさから彼を解放してくれる家政婦でしかなかった。それは本来の家庭の意味を持たない、形だけの夫婦であり、そこで欠落した恋愛を、彼はドゥドト夫人に求めることになるのである。こうして男性に完全に従属した女性像は、すべてその家庭体制の拒絶とともに否定されているのである。つまり彼は、自己革命的ルソーにはなり切れなかった。それは彼の願望の域を出なかった。そこには必ず恋愛至上主義的、依存的ルソーの素顔が現われてくるのであった。その原因として、私は彼の生来の

怠惰性を指摘したい。彼は、心と頭の中は誰も及ばないほどの感動と高貴なる理念に満ちあふれているのであるが、しかしその怠惰性と臆病さによりそれらを全く行動に移すことができないのである。彼は自らを語って次のように述べている。「思いきった飛躍によって彼にできないような偉大なこと、美しいこと、高潔なことはなにもありませんが、すぐ疲れて、たちまちもとの無気力に落ちこむのです。気高く美しい行為がある瞬間に彼の勇気のなかに芽生えたとしても無駄で、すぐそのあとにつづく怠惰と臆病が彼を引きとどめ、無気力にしてしまいます。……要するにこれほど感動しやすいくせに、行動するようにはできていない人間は、かつて存在したことはありません。……意志の力は決心することだけに使い果され、実行するための意志力はもう残っていないのです。」⁶⁸ つまり、自己革命の決心による高邁なる自由独立、有徳なるルソーは、実行の伴わぬ観念上の理想にとどまらざるを得なかった。したがって、彼自身は決して有徳なる人間にはなれなかった。しかし観念の世界で美德を語ることにかけては、誰にも負けない情熱を有していたのである。裏を返せば彼が著作の中であれほどの雄弁さと明析さを持って、徳への愛を語ることもできたのも、それが自らが身を置かない純粋に観念的な世界であったからかも知れない。「この男は有徳ではないでしょう。なぜなら彼は弱く、徳とは強い魂だけが持つものだからです。しかし自分に到達できぬこの徳をだれがこの男以上にたたえ、いつくしみ、あこがれるでしょう。だれが彼以上に鮮やかな想像力をもって徳の神聖な姿をよりよく描けるでしょう。だれが彼以上に優しい心をもちながら彼以上に徳への愛に酔えるでしょう。」⁶⁹ 実際に美德の実行者とはなり得ない自己を自ら認め、女性への従属性、恋愛への執着心に忠実にならざるを得ないルソー。私は特に彼のこの本質的な姿勢が、実生活のみならず各作品においても最終的にあえて反映されているという事実、彼の率直なる人間性を認めるのである。彼はあくまでも正直に生き、同時に作品の中でも真実の自己の姿を表出せざるを得ない人物なのである。このように、作品中に見出される2種類の従属的傾向、つまり、彼の観念的理想としての、女性の男性への従属性、有徳性の高揚、それらに支えられた堅固なる家父長的家庭組織の推奨と、彼の

本心の表出である男性の女性への従属性、恋愛の至上性、家庭体系の否定、これらすべては、自己矛盾の中で苦悩するルソーそのものが真の姿を現わし、彼自身、実生活とともに作品の中においても自己に忠実に生きた証しであると言える。

< 註 >

- (1) Rousseau, Jean-Jacques, *La Nouvelle Héloïse* I, lettre 1 (Oeuvres Complètes de J. J. Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade t. II) ルソー全集, 第9巻, 白水社
- (2) *ibid.*, I-1
- (3) *ibid.*, I-2
- (4) *ibid.*, I-2
- (5) *ibid.*, I billet de Julie
- (6) *ibid.*, I-11
- (7) *ibid.*, I-12
- (8) *ibid.*, III-18
- (9) *ibid.*, I-29
- (10) *ibid.*, III-5
- (11) *ibid.*, III-18
- (12) *ibid.*, III-15
- (13) Rousseau, Jean-Jacques, *Emile*, Préface (O. C. t. IV) ルソー全集, 第6巻
- (14) Rousseau, Jean-Jacques, *Sur l'origine de l'inégalité*, seconde partie (O. C. t. III)
- (15) *Emile* livre I
- (16) *ibid.*, IV
- (17) *ibid.*, V
- (18) これについては筆者の小論『*La Nouvelle Héloïse* から *Emile* へ—二つの女性像の考察—』1978年親和女子大学研究論叢第11号において検討した。
- (19) *Emile* V
- (20) *ibid.*, V
- (24) }
- (25) *La Nouvelle Héloïse* III-XVIII
- (27) }
- (28) *ibid.*, IV-XVII
- (29) Gourcy; *Essai sur le bonheur*

- (30) *La Nouvelle Héloïse* III-XVIII
- (31) *ibid.*, III-XVIII
- (32) *ibid.*, IV-X
- (33) Rousseau, Jean-Jacques, *Discours sur l'économie politique* (O. C. t. III) ルソー全集, 第5巻
- (34) Rousseau, Jean-Jacques, *Du contrat social* livre I-II (O. C. t. III) ルソー全集, 第5巻
- (35) Rousseau, Jean-Jacques, *Emile et Sophie* (O. C. t. IV) ルソー全集, 第8巻
- (40) }
- (41) *La Nouvelle Héloïse* VI-VIII
- (42) *ibid.*, VI-XII
- (43) *ibid.*, VI-XII
- (44) Rousseau, Jean-Jacques, *Les Confessions* V (O. C. t. I) ルソー全集, 第1巻
- (45) *ibid.*, VI
- (46) *ibid.*, VI
- (47) *ibid.*, IX
- (48) *ibid.*, VII
- (49) Rousseau, Jean-Jacques, *Correspondances générales* I (lettre à Madame Francueil, 1751, 4. 20)
- (50) *Les Confessions* IX
- (54) }
- (55) ルソーは、『告白』において『新エロイズ』の構想を述べる中で、サン・ブルーをできるだけ自分に似せて作ったと述べている。「わたしはこの二人の女に、たがいに似ているが別々の二つの性格をあたえ、……わたしは二人の美しいモデルに惚れこみ、できるかぎりその恋人、その友達をわたしに似せようとした。ただし、愛すべき若い男に仕立て、そのうえ自分でみとめるわたしの徳と欠点とをそなえさせたのである。」(*Les Confessions* IX)
- (56) *ibid.*, IX
- (57) *ibid.*, VIII
- 58) Rousseau, Jean-Jacques, *Rousseau juge de Jean-Jacques* deuxième dialogue (O. C. t. I) ルソー全集, 第3巻
- (59) *ibid.*, deuxième dialogue